

## 建学の精神「捨我精進」について

「捨我精進」は、田園調布学園大学の前身である調布女学校初代校長、川村理助先生が作られた言葉です。本学創始者、西村庄平先生（現理事長、西村昭先生の祖父）は、川村先生がこの言葉に深く共鳴され、女学校校主として「捨我精進」を实践する生涯を送られました。この精神は調布女学校創立以来、86年にわたって学園の精神として大事に守り伝えられてきました。

さて、川村先生は、「捨我」とは我情、我欲、我見といった「我」をつつしみ抑えること、また、「精進」については物事を一生懸命純粋に実行することとしています。我情、我欲とは、むき出しの感情や自分の欲望といったところでしょうか。そういったものを抑えて、目前にある事柄にまい進することが「捨我精進」の意味になります。

では、具体的にどんなことが「捨我精進」なのでしょう。川村先生は親子の関係にたとえて次のように述べています。

「母親が我が子を育てる様子を御覧なさい。決して我を張りません。好きだ嫌いだ（我情）とか、損だ得だ（我欲）とか、理屈が通るとか通らない（我見）と云うようなことは少しも考えません。只何となく我が子よかれと一心不乱にはぐくんでのいるのです。このようにして母親が深い愛情のもとに我が子に精進しているからこそ、美<sup>うる</sup>わしい親子一如<sup>いちによ</sup>の姿が生まれるのです。」

例えば、皆さんが大学で保育のことについて学んでいるのは、将来保育者になりたいといういわば我欲です。しかし、資格を目的に学んでいるうちに様々な興味や関心が出てきて、もっと知りたい、もっと学びたい、そして子どもと実際に接してみたいと思うようになるでしょう。そして実際に実習に出て子どもと触れ合う時、保育士資格に必要な単位数がどのだとか、出席日数が足りているかなどということは思い浮かばないでしょう。我欲から発したものが、いつの間にか我欲から離れ、深い学びになっている。「自分が自分が」と思っていたことが、自然に自分から離れ、人のためになっている。これが「捨我精進」なのです。

さて、「捨我精進」、どうやら深い目的があるように思われてなりません。この目的について、川村先生は著書『平和の心境』の中で「不安動揺を根治する」ためと述べています。つまり、苦しみや悩みなどの不安動揺をなくし、心の平安、精神的自由を獲得するということです。実はこのことは、古来、哲学、宗教が求めてきた普遍的な理想です。仏教では「生、老、病、死」から逃れるために「悟り」を開くことを目的としましたが、この「悟り」とは心の平安でもあるのです。私達人間は、しょっちゅう喧嘩をしたり、悩んだりする愚かな生き物です。でも、人として生まれてきたからにはより良く、そして他者とも幸福に生きたいと願う善良な生き物でもあるのです。

川村先生は、自分の苦しくそして厳しい体験から、自他を幸福にする「捨我精進」の道を見つけられました。この道には特別な方法など必要なく、身近なことを実践するだけで良いのです。学生である皆さんが「捨我精進」に向かうためには、まず日々の「学び」から始め

ることです。学ぶことは、最初はしんどいことです。また、他にやりたいことがたくさんあるかもしれませんが、でも、学ぶことを少しずつでも続けることが、自分の中に興味や関心を呼び起こし、学ぶ苦しさが学ぶ喜びに変わります。この喜びは、皆さんの大学生活の中で最も意味のある喜びであり、余計なものを捨て去った本当の自分になるための鍵になるものなのです。

いつしか「自分のため」を乗り越えて、他者のために尽くせる人物になる、それが「捨我精進」の究極の目的なのです。

●川村理助先生（慶応3年・1867～昭和22年・1947）

川村理助先生は、慶応3年（1867）に、茨城県南の岡見に生を受け、茨城師範学校から東京高等師範学校（現在の筑波大学）に進まれ、首席で卒業されました。その後、若干28歳で和歌山師範学校（現在の和歌山大学）の校長となる俊才でした。しかし、家庭的には、長男が2歳で脳膜炎により知的障がい者となり、また夫人が脳溢血による半身不随で寝たきりとなり、約30年にわたる介護の生活の日々を送られました。その厳しい介護の年月の中で、本文で述べた「捨我精進」の道を悟られました。大正15年、校主西村庄平先生の招きにより、調布女学校の校長となられ、以後20年にわたって女学校の校長として、生徒の育成に努められました。



川村理助先生

●西村庄平先生（明治9年・1876～昭和8年・1933）

西村庄平先生は、明治9年（1876）に、徳島県岩倉村に生まれ、官立の商船学校（現在の東京海洋大学に学び、日本郵船会社で外国航路の船長として活躍しました。後に田園調布の地に調布女学校を設立され、川村理助先生を学校長として招聘しました。「捨我精進」を實踐され、学校経営のみならず清掃から各教室のストーブの火おこしまで、雑務という雑務を率先して行われました。西村先生の生徒のために尽くされる姿は彫刻となり、現在も学園本部に設置されています。



西村庄平先生